

---

# B L 小説 (タイトルが決まらない)

たにぼん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BL小説（タイトルが決まらない）

### 【Nコード】

N3606Q

### 【作者名】

たにぼん

### 【あらすじ】

主人公、水原香月が通っている

花崎高校は男子高、全寮制の高校。

恋人はほしいが、全寮制のため彼女は作れないに等しい。

高校生活を楽しんでいる所に

アイツが出てきて香月の高校生活が・・・？

## 1話（前書き）

初めてのBL小説を書きます。

駄文、駄作ですがそれでもいい方はどうぞ見てください。

性的なことが含まれるため苦手な方は回れ右でお願いします

## 1話

俺は水原香月<sup>みずはらかづき</sup>、高校1年  
今日は花崎高校<sup>はなざきこうこう</sup>の入学式  
花崎高校ってのは俺がこれから通う高校だ  
男子校で全寮制って言うのが傷だけど  
家からは徒歩15分で行く。

俺は大人数より少人数・・・1人とか  
少ない方が好きだ、はつきり言って1人の方が好き  
口下手だから話すのも絡むのも苦手。  
それに性格は超、地味。・・・だと思う。

それとは逆に、見た目はそこの男子に比べると  
可愛い方ってみんなから言われるし  
顔もすっごく明るい感じだ  
地味ってのが全然分らないくらいに。

身長も低くて159センチしかない  
小柄な体系で体力もあんまりなくて  
声も高め、その拳句<sup>あけく</sup>仕草がなぜか女の子みたい  
もう高校にもなったのに近所の人には

『香月君って何歳だったけえ?』って言われる。  
さすがにちょっと重症だ。年齢すらわかれていない。

彼女は、もちろんほしいけど

男子高だし、全寮制ってこともあって  
彼女なんて作ってる暇もない。

まず、出来たとしても弟か年下に間違われるに決まっている。

そんなことを考えていると

”ドン” と誰かにぶつかつた。

「つてて・・・、すいません」

そういつて見上げると俺と同じ高校の制服を着ている男子が立っていた。

## 2話

「・・・女？」

「・・・はあ？」

「だから、お前女？」

今、一番聞きたくない言葉が聞こえてきた。

もう一度確かめる

「えっと・・・？」

「だーかーらあ、お前女か？つて聞いてんだけど」

「・・・つて言った？」

「は？聞こえねえんだけど」

「今、女つて言ったよね？」

「ああ、そうだけど？」

あー、何かやつかない感じだぞ、こういうのが一番キライだ。

「女つて言うな！一番聞きたくねーんだよ！」

そついつて俺は走った、あいつの視界から消えるように。

「女つて言つちや悪いのかよ、あんな面しやがって。」

そんな言葉は聞こえるはずも無かった。

「はあ・・・つ。」

体力が無いせいなのか、すぐに息が荒くなる。

校門がチラリと見え小走りで校門に向かう。

ふいにその時に足がガタついて体が揺れる。

「あ・・・。」

こついつのはいつも通りだ。

息が整ってないのに走り出すといつもこつになる、こついつのには慣れっこだ。

どうせ気を失うんだろう。

その時誰かが俺を呼んでいた・・・様な気がする。

「大丈夫か！？・・・おいつ。」

校門の前で俺は倒れた。

### 3話

目を開けるとそこは室内だった。

「いたたた・・・、ココは・・・。」

頭を抑えながら体を起こす

「お、目覚ましたか」

そこにはアイツが立っていた。

「おつ、お前！！！」

「それにしても・・・寝顔？本っ当女みたいだな。」

「だから、女じゃないっていつてるだろ！お前は人の嫌がることをするのがすきなのかよっ！」

「好きですけど何か？」

「うっわ・・・、趣味悪いな。」

「あ、後 お前、お前っていうな。」

俺には石川真人いしかわまことって名前があんの。俺のこと真人って呼べよー

「で？お前の名前は？」

「水原香月。」

「うわ、名前まで・・・。」

「女みたいって言うなよ。」

アイツ・・・石川が言い終わる前に言ってやった。

「チツ、言いたかったのに。」

「言っても意味ないだろ」

「そうかー？可愛くていいとおもっただけだなー。彼女にしてやっ  
てもいぞ。」

「なっ！お、俺は男だ。それにちゃんといっているもんはついてんの。」

「

「愛があるなら関係ない・・・」

「ふざけるな、お前と付き合うつもりなんかないぞ。」

てかさ、おま・・・石川なんでこの部屋に居んの？」

「あ、言うの忘れてた。香月と俺一緒に部屋なんだぜ？」

「げっ・・・まじかよ。あー、それと、下の名前で呼ぶな。」

「いいじゃん、俺の好きにさせてよ」

「あー、面倒くさい、もうどうでもいい何でも勝手にしとけ。」

「何でも勝手に・・・？」

「ああ、もうしらねー」

「言ったぞ、お前何されても文句言つなよ。」

「言わない、言わない。もううるさいから静かにしとけ・・・」

そういつて、ため息をついて目を閉じた。

その瞬間に俺の唇に何かが当たった・・・！？

「んっっ!?!?!?!?ちよ、おま・・・っ!」

俺は目を見開いた、目の前のそこには石川の顔があったから。

ちよっ・・・!コイツは何考えてんだ!?俺は男だぞ!!

・・・、それにしても石川つて以外に顔立ちきれいだよな・・・

つて何に考えてんだ、俺!

そんなことを考えてると石川が俺の唇から離れた。

「何してもいいって、勝手にしとけって言ったのはお前だぞ？」

「でっ、でも・・・いくらなんでも・・・っ!」

「可愛いからいいの!」

「っ・・・。」

今の俺の顔は多分真っ赤だと思う。何にせよ初めてのキスだったからな。

「・・・って、え!?初・・・キス・・・俺のファーストキスがああっ!!--どーしてくれんだよ!」

なみだ目ながらに石川に訴えた、すると

「いやー、何しゃべってもお前は可愛い。」

と、熱心に語りだした。

ああ・・・これからの俺の生活は一体・・・。

## 4話

あれから何日が過ぎて、石川とは何とかやってきている。

でもひとつ面倒な事が増えた、それは毎日

「キスさせてよー?」

って言うてくる。それに対して俺は

「うるさい、どっかいけ。」

で終わらしてるけど・・・

まあそんなことはおいといて何故か今日

「酒飲むぞー!」って事になった、もちろん俺は飲まないけど。

「あのさ、思うんだけど・・・寮で酒なんか飲んでもいいわけ?見つかっても俺はしらねーぞ」

「大丈夫、大丈夫!」

と、いつもに増して上機嫌に返事をしてくる。

まあ、コイツと話してる事自体が疲労になるからほっておこう。

そして、いつのまにか夕方・・・夜か。

夜になっていた

ガサガサとビニール袋の音を立てながら石川と石川の友達が入ってきた。

俺はまだ友達は出来ていない、というより作りたくないだけだ

それに比べて石川はもう何人が出来ている。まあ、その前に俺は人数とか

嫌いだし・・・。

そんなことを考えてると部屋に2人ぐらい入ってきた。

「おー、コイツが真人の言ってた水原かー。ん〜、確かに可愛い。」  
なんか勝手にコメントをしている。

もう1人の男子も頷いている

何故か、気分が悪くなってきた。俺は石川に

「ちよつと気分悪いから寝てくる。」

と一言だけ残して、寝室・・・といつても隣の部屋だけど、

そして俺はベッドにダイブ・・・というより飛び込んだ。

仰向けあおむになって天井を見た。

ちなみに俺と石川のベッドは2つに別れている。

部屋の両端に一つずつと荷物を置く感じになっている

ふとんがちよつどいい感じの温度になってきて、まぶたが重たくなってきた

それが心地よくウトウトしているとだんだん眠気が襲ってきていつの間にか寝ていた。

## 5話(前書き)

真人くんがーw笑

書いている自分までにやけてしまう・・・。  
おかしいでしょうか、こんな私って。

## 5話

目が覚めて、ベッドから降りる。

みんながいた場所に帰ると石川以外いなくなっていた

「結構寝てたんだ・・・俺。」

すると目についたのは完全によっぱらってるであろう、石川が机に顔を伏せていた。

「おーい・・・石川？」

そーっと、起きてるか確かめると

「おお・・・、香月じゃん。もう皆帰ったぜ？楽しかったのにい」と酔っ払ってヒョロヒョロした声で言われた。

それにしても・・・酒臭い、酒臭すぎる・・・！

「お、お前、酒臭い。中年のオッサンじゃねえんだしよ。」  
引き気味に言う

「そんなのどうでもいいじゃん」

と、明らかに声の表情が変わった、先ほどの声よりしっかりしていて真剣な感じだ。

そういうと、石川はこちらにむかって歩いてきた。

「どうしたんだよ・・・、てかお前も寝とけ。無理に歩いたりしたら危ないだろ」

そうだ、危ない。こちらにも被害がでそうだ。

千鳥足でこちらに向かってくる石川の方に俺が寄っていった俺の肩を貸す。

もう、寝て欲しいし・・・、隣の部屋に連れて行く。

「お前も寝とけ」

そういつて俺も寝よう。と思いつ自分のベッドに向かおうと振り向いた瞬間に

石川に腕を引つ張られた。そのおかげで俺は石川の上に乗って、仰向けになつてゐる

「はぁ・・・やめろよ、お前」

そういつて石川のほうを向くと頭を思いっきり石川の方に引かれて俺の唇と石川の唇が重なつた。

「ちょ、お前っ！何してんだよっ！」

照れながら俺は一瞬にして石川の唇から離れた

「照れてるお前、可愛い」

そういつて満足げに言い、そしてまた俺に口づけた。

「っ・・・お、前！・・・やめろっ」

不意に口が開いた、その瞬間に舌が入ってきた

「・・・っ・・・はぁっ・・・や、め・・・っ」

一度唇が離れる。

「へえ・・・、お前つて声までかわいいのな」

「そ、そんな事言っ・・・」

『言つな』と、言い終わる前にまたキスをされる。

「・・・ふ・・・あっ・・・やめ、ろっ」

石川の舌が俺の舌をあたつてくちゅっとなめた音が漏れる。

5話(後書き)

(作成中・・・、次話に続きます)

## 6話（前書き）

真人くん大胆だわぁw笑

でも、個人的に水原君LOVEですw

友達には真人くんの方が好きッていわれてるんですけどね^p^

## 6話

「そんなに、俺の事嫌いかな？」

石川が唇を離して聞いてきた

「そ、そんなの・・・。」

俺は男なんだぞ・・・？男なんか好きになれるわけないじゃ・・・ん。

今の俺の顔は石川に見せれるようなものじゃないと判断して顔を横に向けた

運良く、部屋が暗くてよかった。と安心する。

「・・・もう・・・いいだろ、こんなまね二度とするな。」

そういつて石川の上から降りて自分のベッドへ行く。

ベッドに乗ろうとしたその時石川が俺の肩に手をのせた

「・・・まだ何か用があるのか・・・？」

そういつて振り向くと、今度は俺のベッドに押し倒された。

「ちよっ・・・やめろっ！またあんなのするのかよ！俺はいやだから・・・離れろっ！」

俺は石川にそういつと、何故か石川が一瞬笑った。

「へえ・・・？口答えするんだ・・・。」

その言葉を聞いた瞬間背筋がゾっとするのが分った

「・・・なんだよ。口答えして何が・・・何がわるいんだよ！」

強気になっていたものの、内心はちよつと怖かった。

「何？なみだ目にでもなつて俺を誘惑してるわけ？」

石川が言つたときに気づいた、なみだ目だったんだ。

「そ・・・んな事するわけ・・・、無いだろ・・・？」  
声が震えた。

「お・・・前・・・怖・・・い・・・。お前は・・・石川じゃない・・・。」

「俺は、石川だぜ？石川真人の何者でもないさ。」  
「そういうと、石川は俺の肩をつかんで  
体を起き上がらせた。内心ホっとしたその時だった。」

## 7話

また口を塞がれ、口内を荒らされる

「んんっ！やめっ…ふっ…あ」

顎あごを？つかんで、上を向かされた

石川の舌が入りやすくなったのかいまさっきより激しく口内を荒らされる。

「んっ…あっ…」

唾液が俺の口元から顎にかけて流れていく

…なんだか、抵抗するのもバカらしくなってきた。

もういいか、と思い俺は石川のされるがままにしておこうと思っただ、その時に口を離された。  
まるで、俺が抵抗するのを止めたことを分ったように。

「面白くない。」

そう言った限り、石川は自分のベッドへ向かって行った。

「…なんだよ、なんだよ！今さっきまであんな事してやがったのにつ…！」

いつの間にか俺は泣いていた、何でだろう。石川なんか放っておけばよかったのに

「待てよ…！」

「・・・何だ？文句か？文句なら聞かないから。」

「・・・文、句は・・・無いけど・・・っ！」

「じゃあ、何だ？」

と、冷たく言われた。そんな言い方されたら・・・

「・・・っ。もう・・・いい。」

俺はベッドに上がる。すると石川の声が小さく呟いた

「かつ・・・き・・・だ」

最後の辺りは消え入りそうな声だったので聞き取りにくかった。

明日は・・・起きたくない。いや、もう起きたくない石川の顔も見たくない

・・・なのに、目を瞑ると石川の顔が浮かぶ。

嫌で嫌で、嫌なのに何故か顔が浮かぶ。

その日の夜、俺は頬を涙で濡らしながら寝た。

## 8話

俺は、次の日何故か早く起きてしまった。  
まだ朝の・・・5：17だ。

なんだか、今日は早く部屋を出たい気分だ。  
朝食を軽く済ませて部屋を出た。

俯うつむいて寮の廊下を歩いてると誰かとぶつかった。

「・・・すいません。」

そっぴゃ、石川と出合ったのもこんな感じだったな・・・。  
って、石川のことを考えるのはやめよう。

「大丈夫？君」

「え？あ、はい。・・・すいませんでし・・・た。」

気の抜けるような返事をして、学校に向かおうと  
歩こうと思っただらそれを察知したのか

「ねえ、僕暇だからちよつと付き合ってくれない？」

「え・・・？あ・・・俺でよければ付き合いますよ。」

「有難う」

そうニコつとした笑顔でいわれると、手を握られた。

「えっ・・・？」

そういうと、気が付いたように

「あ、ゴメンゴメン、嫌だったよね。」

と、困った顔をした

「あ、いえ、全然平気ですよ。」

あせって、そういう返事をした

すると、その言葉を待っていたかのように

また、俺の手を握った。

手を握られている間は不思議な事に石川の事は忘れられた

連れてこられたのは、学校の敷地内にある温室。

「ここ……。」

「うん、温室。ここって落ち着くんだよね。」

「俺は……始めて……。何か、落ち着く……。」

「そうそう、自己紹介忘れてたね。僕は2年の柴田瑞樹しばた みずき、宜しくね。」

「はい、こちらこそ……。俺は1年の水原香月です。」

温室にある、ベンチに俺たちは腰を掛ける

「いい名前だね。」

突然言われてビックリした。

「……いい名前なんかじゃありませんよ。」

「……顔だつて女みたいだし、それに名前も……。」

「そんなこと無いよ、いい名前だしそれに顔も可愛いじゃん。僕は  
そういう男の子好きだよ?」

そんなこと言われたのはじめてだった

なんか、心が温かくなった。

## 9話

「はぁ……。」

「どうしたの？ため息なんかついちゃってえ」

「あ……いえ、気にしなくていいですよ。」

「そんなこと言われるときになるじゃん？」

「あ……はは……先輩って何か……その……のんびりした感じですよ。」

「うーん、そうなのかもね。って今、話しそらしたでしょ。」

「まあ、そこは気にしちやいけないツスよ」

「まあね」

なんか先輩と話していると気が楽だな……。

「先輩と話していると気が楽になります」

「そう？でも嬉しいな。でも、気が楽になるって事は……何か悩み事でも？」

うっ、痛いところをついてこれらた……。

「まあ……無いって事は無いんですけど……。」

「あーと！敬語やめようよー、何か気が重いよ。タメ口、タメ口！」

「え……でも……。」

「いいの！先輩命令！後、僕の事は瑞樹でいいよ。」

「先輩命令って……でも先輩はつけさせてくださいよ。」

「んー、まあいいか。じゃあ、僕は香月って呼ばせてもらおうよ。」

「は、はい……。」

先輩は考えたような顔をして言った

「アウト」

「へ？」

「んー？だから、敬語使ったっからアウト」

「え……！？アウトって？何するんですか！？」

「2アウト」

「うっ。」

よし……そうくるか、だったらタメ口で話してやるっじゃないか！

## 10話

「わ、わかつ・・・たよ！タメ口で話せばいいんだろ・・・？」  
「うん」

楽しげに笑みをこちらに向けながら返事をしてくる

「やってやるうじゃん。」

「うんうん。いい子、いい子」

そういつて、俺の頭をなでてる

「あの・・・さ、名前は？み・・・ずきじゃないとだめ？瑞樹先輩じやだめ？」

「だーめ、タメ口で話してんのに先輩はダメだろ？」

「チエツ、まあいいか。わかりましたよーだ、瑞樹せ・ん・ぱ・い  
っ。」

「ん、まあいいか。でも基本は呼び捨てだからね？」

「はいはい。」

何か、自分でも驚く。こんなに話せる奴だったんだ・・・俺

「じゃあ、もうすぐ予鈴なるし校舎行こうか。」

「え？ああ！ほんとだ！」

「じゃあ、そうと決まれば早く行くよっ！」

そういつて瑞樹は先に走り出した。

「ちよ、まってよ！俺走ったらまた・・・。」

聞こえて無さそうだ。まあいいか、気を失ったら

それはそれで、楽だし。授業受けなくて済むし。

俺は、走って追いかけた。

「はあ・・・っ、はあ・・・ま、ってよ・・・。」

「もう、息切れ？」

「俺はっ！運動神経ないっ・・・の・・・だから次は走らないで、また気を失う・・・から。」

「ん？気を失う・・・？」

何故か口の両端を少しだけ上げて、また走った。

「え？なんだよっ・・・？ちょ、待てっ・・・て・・・っ」  
また、俺は走る。

「あー、もう無理だ。」

足に力が入らない。入学してから8日目、また俺は気を失った。

「へえ・・・、こういうことか。」

気が遠くなる前に聞こえた一言・・・瑞樹の声か。

そのまま、俺は気を失った。

10話(後書き)

ネタが出てこない・・・(汗)

## 11話

「っ……っ、どこどこ？」

どこかのベッドに寝転がっていた

「僕の部屋」

そういつて瑞樹が俺の目の前に顔を出した。

「うわっ!!ビックリさせるなよ!!!!」

そっぴや……

「あのさ、俺が気失う前に”こういうことか”って言ったよね？

・アレは、どういうことですかー？」

多分、俺は今引きつった顔で瑞樹に問いかけてると思う。

「うっん、試してみたいな？」

「勝手に、実験材料にするな。……そっぴや、この部屋もっ  
1人いないの？」

「あー、ここね、僕1人なんだ」

「え？まじ??いいなー。」

「だから、何をしてもいいってわけ」

「何してもいいって……、一応ココ寮だよ？共同だし。」

「まあ、そういう意味では何もしていいってことじゃないけど……  
」。

と、ブツブツ独り言を言っている

……っん?待てよ

「どういう意味?そういう意味では、って……っ?」

「ん、深く考えちゃダメだつて。」

「……っん。そう……だよな」

「うん、そうそう。」

何か、嫌な予感が……。

「それに、僕は我慢強いタイプだから」  
「ん？瑞樹は一体何をいつてるんだ？」  
何を言いたい？

「……どういう意味？」

「もー、香月は鈍いよね。」

「……鈍くて結構。……スイマセンでしたなーだつ。」

「もー、ほんと可愛いよねー。香月は」

そいつって俺の頬ほつぺたをつまんでクニクニしてきた。

「いつへーひゃ、ひゃへひよひよ（いってーな、やめろよ）。」

「お人形さんみたい、可愛いー。」

「おはへはほんはは（お前は女か）」

「んゝ、まあ環境が環境だしねー。」

「ふーん。……今日はココで寝かせてもらっつよ」

「いいけどー。何かあったの？」

俺は自分の頬をさすりながら言った。

## 12話

「うーん、同じ部屋の奴と喧嘩した．．．みたいな感じ？」

「ふーん．．．どうも嘘っぽいね。喧嘩なんかしてないでしょ。」

瑞樹の顔が少し、真剣になったのが分る。

それにしても、つくづく思うけど瑞樹って変な所に勘がいいよな．．．

「．．．で？何があつたの？」

「え．．．？．．．べ、別に．．．。」

同じ部屋の奴にキス（ディープキス）をされた。なんて軽々言えるわけねえよな．．．

「何？何か嫌な事されたの．．．？」

「嫌な事．．．って言ったら嫌な事だと思っけど．．．、瑞樹には  
いえない．．．かなあ？」

「僕に聞かないですよ。疑問系にしないで。返事できないじゃないか。」

「あはは．．．。」

「笑う所じゃないと思うよ。僕は香月のために聞いてるんだから。」  
ふざけた言葉が嘘のように、とつても真剣な顔で聞いてくる。

「．．．．．言えば．．．いいの？」

「うん、そいつが嫌なんだろ？その時は僕が助けてあげるから。僕  
を信じて？ね？」

「．．．うん。ん．．．言いくいんだけど．．．さ。」

「大丈夫、香月のタイミングで言えばいいから。」

「え．．．？」

「それまで、ここで何かしようよ。」

そういつて、急にいつも通り（？）の明るさに戻った。

「……瑞樹って何か雰囲気変わるんだな。」

「……ん？何か言った？それとも……まあいいか。」

「う……ん、ゴメン。やっぱなんでもない」

まあ、いいか、気にしないでおこつ

### 13話

「みず・・・き、やっぱ俺寝るわ。」

「えー、面白くない。まあ香月の体調もあるしね」

「うん・・・、ゴメン。・・・あ、ベッドどっち使ったらいい?」

「ん?入って右側使いなよ。」

「うん、有難う。」

瑞樹に言われた通り右側のベッドに俺はもぐった

(なんか、体がだるい。・・・何も考えないでおこう)

そう思い布団を顔の近くまで上げて・・・眠りについた。

なんだかいつも以上に布団が温かい。

寝返りをうつってから目を開けると目の前に瑞樹の顔が・・・!

「・・・・・・・・ん?み・・・・・・・・ずきい!???」

「あー、ん?何?それより耳元で騒がないでよ。寝てたのに・・・。」

「・・・寝てたじゃねえよ!!!なんでお前ここにいんの!?!」

「え?だって僕のベッドだし・・・。」

「いや、お前コツチで寝ろって言ったよな。」

「うん、もちろん。そのつもりでもいたし。」

「はあ?? 俺と瑞樹は兄弟じゃねえんだぞ??」

「いいから。ココで寝てる。」

そういつて瑞樹は俺の頭を自分の胸の辺りに持つていつて

抱き合つてるといつか・・・、腕枕みたいな状態になつてる。

「ちよ、やめろ・・・つて!」

## 14話

「いい子なんだから静かにしなさい。」

「……………」

「なんだあ、できるじゃん」

「…何か瑞樹ってお母さんみたいだよな……………」

「よく言われる、もうちょっとここで休んどけよ」

「う、ん……………」

(何か…………瑞樹の方が気が楽だな……………)

「…………ス、されたんだ。」

「え？」

「…同じ部屋の奴…石川真人って言うんだけど……………」

「うん」

「そいつにキスされた。」

「はあ？まさか、それが原因？」

「…なんか悪いかよ。」

「いや、別に。可愛いなって思ってたさ。」

(なんだよ……………)

「調子狂うじゃん。」

瑞樹はフツツと鼻で笑って俺の頭を撫でた

「俺を子ども扱いするな」

「え？僕のことをお母さんみたいって言ったのは誰かな？」

「ふん……………もう少し……………ココで休む。何日かお世話になるよ。」

「はいよ。好きなだけここに居ればいいよ」

「俺学校には行かないから。ずっとここで休んでおく」

「よし、じゃあ先生には僕が言っておくよ。ちなみに僕は生徒会長

なのダ」

「は？」

「うっそー、うそに決まってるじゃん」

そのまま香月は眠りについた。

「ほんと、君は可愛いよね。反則だよ」

とつぶやいた言葉は聞こえるはずもなく・・・。

## 15話

「もう朝だぞー、起きろ」

「ん……？後……10……30分」

香月の本心は30分どころかそれ以上寝たいと思っている

「……起きないとキスするぞ」

突然の言葉にびっくりする

「は！？ふざけんじゃねーよ……起きればいいんだろ、起きれば」

「そういうことー」

「あ、俺今日学校休むって言ってたじゃん」

「んー、そうだけど。」

もう寝かせてくれ、と瑞樹に頼む。本当に体がだるい。

まあいつか。と一言のこして瑞樹は部屋から出て行った

……と思ったが思いっきりドアが開いた。

「かつつきー！ちょっとお前こい！！いいこと思いついた」

「はあ？」

「いいからー！」

そういって、瑞樹は香月の手を握って引っ張っていった

「で？何故に温室？」

「さて、何故でしょうか？」

？学校始まるまで雑談

？僕がサボってずっと雑談

？……ぼーっとしておく。で、雑談」

「……どれだけ雑談好きなんだよ」

「んー、楽しいし」

「じゃあ、全部とか？」

「……全部だったら最終的に僕がサボる事になるよ？」

「……もしかしてそれが狙いだったのか」

「んー、違っつてことじゃないけど……」

「あつてんじゃないかねえかよ」

しゃべりながら、俺たちは温室にあるベンチに座った。

「……そういや、瑞樹って彼女とか居るの？」

瑞樹は鼻で笑ってから言った

「この僕が、彼女を作るとでも？」

「うん。思うよ？だって瑞樹ってかっこいいしさ、絶対もてるでしょ？」

「……そんなことないよ。僕には好きな人も居るけどさあ」

「じゃあ、告ればいいじゃん。瑞樹顔もいいからOKしてくれるんじゃない？」

「顔もつてあんた……、そこは性格もっていれなきゃ」

「ハハ……確かに」

……何かこんなに楽しく話すのって何年ぶりだろ。

「どうしたの？顔色悪いけど。」

「そんなことないって……それより告れよっ！」

早めに取っておかないとその子に彼氏できるかもよ？」

「……確かに。あの子がとられちゃったら僕悲しいけど。今もとられないようにしてるし？」

「へー、どうやって？」

俺が聞いたとたん、明らかに瑞樹の顔が真剣になった

「教えて欲しい？」

「え？ん〜、どんな見た目か、とか・・・」

「見た目？・・・目がぱっちりしてて・・・肌がちょっと白くて・・・」  
「・・・うん。」

俺は何故か真剣に聞いている

「・・・やっぱり、特徴を言うより・・・見に行った方がいいよね」  
「え？こんな朝早いのに？」

「うん。」

瑞樹は即答して、俺の手をつかんで走り出した

走ってる途中、どう考えても寮に向かっていた

「・・・寮にいるのか？そいつ。」

「・・・っていつていいのかな？」

「瑞樹の好きな人ってさ、まさか男とか？」

恐る恐る聞くと

「うーん、まあそうなんだろうね。僕には可愛い女の子にしか見えないけど」

ついたよ、と言われ部屋にはいるとそこは瑞樹の部屋だった

「は？瑞樹の部屋？」

「うん、あぁいいからついてきて」

何故か洗面所に俺を連れて行く

「・・・？鏡・・・？」

「うん、」

そういつて瑞樹は鏡から離れて

「・・・今鏡に映ってる人だよ？僕の好きな人。」

「・・・は？俺？」

「うん。香月」

「はあ？なんで、俺？」

「香月が可愛いからに決まってるじゃん？」

「う……、可愛いっていうなあ」

「でも、まさかこんな告白の仕方になるとはね」

「……」

俺はいまいち状況が飲み込めない

「……嘘とかじゃなくて？」

「何が？」

「俺のこゝと好きっていうのとか……」

「嘘じゃないよ。大真面目」

15話(後書き)

・・・最近会話文が多い

## 16話

「・・・よし！ここは深く考えないでおこう

「・・・話変わるけどさ、俺明日学校行くわ。もう自分の部屋にも戻るし」

「そっか、香月がそうしたいならいいけど・・・

「嫌な事とかされたりしたら僕が守ってあげるから、いつでも待ってるよ」

「守るって・・・大袈裟おおげさだな」

「うん、大袈裟おおげさなのが僕の取柄とりがらだし」

「大袈裟おおげさなのが取柄とりがらだったのか、初めて知ったぞ  
そういうと俺は

「じゃ、俺今から部屋に戻るから。」

「うん、わかった」

そう言って俺は部屋を出た

「・・・石川怒ってるかな・・・。」

俺はフッと鼻で笑ってからドアノブに手をかけて  
部屋にはいった

「・・・香月。」

「あ、ああ。石川・・・。」

「・・・なんだこの空気！気まぜすぎるぞ

「どこ行ってたんだよ」

「あー、うん。知り合いの人の所。」

「心配したんだからな。こっちのみにもなれ」  
「そういうと石川は俺を抱きしめた」

「あ………。な、何し……てんの……？」

「いいから……」

「よくない、って……」

「黙ってる」

すると、石川が俺の肩を掴み

俺の顔を黙って真剣に見てきた

「……な、んだよ……？」

石川は答えもせず俺が戸惑っている隙にキスをしてきた

「!？」

一瞬でこの前、酔っていた石川にされたことを思い出した  
「やめろっ!」

俺は石川の胸を思いつきり両手で押した。

(怯んでる隙に逃げなきゃ……っ!)

今さっき部屋に戻ってきたばかりだと言つのに  
俺は部屋を飛び出した

## 17話

俺は逃げながら瑞樹に電話した

「瑞樹っ・・・助け、て。部屋に入れて・・・っ！」

『何があつたの!?!』

「今は話せない、から。部屋・・・っ！」

『わかった。』

そついうやり取りをして、俺は電話を切った。

石川が俺を心配した様子で追いかけてきている。

俺は瑞樹の部屋まで全力疾走していると

部屋の前で瑞樹が心配そうな顔をして待っていた

「み、ずきっ！」

俺は瑞樹の胸に飛び込んでいった

「はあっ・・・はあっ」

「まあ、とりあえず部屋に入つて。」

「う、ん・・・。」

後ろを見ると石川が立ち止まっていた

「く、るな・・・っ！俺に、近づくな・・・っ！」

「か、つき・・・？」

「俺にしゃべりかけるな・・・」

すると、瑞樹は理解したように口をはさんできた

「へえ・・・君が香月の事傷つけた石川真人くん？」

「傷つけたって・・・？」

「趣味が悪いね。香月の気持ちも考えてあげたらどうなの？」  
行こ、香月。と言われ俺は頷いた。

部屋に入ると

「大丈夫？また、何かされたの？」

俺は泣きながら言った

「う、ん・・・っ。」

「なくほどこいやな事？」

うん と言ったつもりだったけど声が出なかった

「そうなんだ、大丈夫。僕が守ってあげるって言ったでしょ？」

「・・・っ、ありが、とう・・・。」

「香月を守るのが僕の役割なんだから。・・・顔上げて？」

「・・・何？」

「そんな目で僕を見上げないですよ。理性がたもたなくなっちゃっよ」

「だって・・・顔上げろって言ったの瑞樹じゃん・・・」

「まあ、そうなんだけどね。僕はあいつみたいに興味ないから、香

月がいいって言うまで待つよ」

「何か変な事に巻き込んで悪かったな・・・」

「ううん、香月の役に立ててうれしかったよ？」

「・・・ありが、と。」

俺は何故かわからないけど瑞樹に抱きついた

「・・・はは、まさか香月がこんなことしてくるなんて。」

「黙れ・・・、今はこうしておきたい気分なんだよ。」

「はいはい。」

そっいつて俺の背中を撫でてくれた

「・・・眠い。」

「じゃあ、寝たらいいじゃん。」

「・・・そうだけど、何か寝たくない」

「何で」

「だって・・・、何かあったら嫌だもん」

「んー、じゃあ温室行こうか」

「うん。」

いつもとは違って、俺の方から手を繋ぐ

「何か、香月積極的だね」

「うるさい。」

内心本当は怖かった。瑞樹が俺から離れていくのが好きとかそういうのじゃなくて・・・、昔みたいにはなりたくないから。

そんなことを考えていると温室についていた

「ベンチ、座る？」

と瑞樹が言ってきた

「ありまえじゃん」

と適当に返答した。

「・・・瑞樹。」

「ん？」

「俺から・・・離れたりしないよな？どっか行ったりしないよな・・・？」

「・・・どうしたの？急に」

「俺って強がってただけなのかも」

「俺な、昔・・・っ・・・」

思い出そうとすると、頭が痛くなる

「・・・嫌な事は無理に話さなくていいから。」

「うん、ゴメン・・・」

「ううん」

「・・・絶対に、俺から離れていかないよな？」

「うん、離れないよ。何があっても」

「そっか・・・、ありが・・・と」

安心したのか俺は気が遠くなっていった

「・・・離れ、ない・・・で。」

最後にそれだけ言って眠ってしまった

・・・ここはどこ・・・？

”独りぼっち”の世界。誰も居ない

瑞樹も・・・誰も居ない。

離れないって言ったのに・・・瑞樹も俺から・・・。

目が覚めるとそこは暗かった。

「・・・ここどこ・・・？」

「・・・あ、香月。おきたんだ」

「瑞樹・・・？」

「うん？どうしたの？」

「っ・・・瑞樹いっつ」

俺は泣きながら瑞樹に抱きついた。今日何回泣いただろ・・・。

「もー、そんなに泣いてたら可愛い顔が台無しだよ？」

「うるさ、いっ・・・」

「・・・それにしても悪い夢でも見た？」

「え・・・？何で？」

「魔うまされてたよ。」

「ま、じで・・・」

「まじ、で・・・どんな夢だったの？」

「・・・何か、皆居なかった。俺、独りだけで・・・瑞樹も、誰も居なかった。」

また・・・見捨てられた・・・。瑞樹が離れないって言ったのに・・・

「・・・」

「・・・そっか。ゴメンな」

何故か誤られた

「え・・・？何で誤るの・・・？」

「夢の中の僕、悪い奴だよ。香月から離れないって言ったのに」

「・・・でも、それは俺が見た夢だし・・・。」

そんなこと関係ない。という風に話を進めていく

「大丈夫。僕がちゃんと守ってあげる。香月のこと離さないから」

「うん、ありがと・・・」

「だから・・・僕にしたら？」

語尾になるに連れて小さくなっていく声が聞こえなかった

「え？なんて？」

「ううん、なんでもないよ」

そういつて、どこか寂しいような笑顔を向けられた

「・・・うん。俺、瑞樹の事好きだから。」

「・・・それって友達として、じゃなくて？」

「友達としてだよ。・・・でも好きっていうか・・・多分、大好きかな」

「そっか。ありがと、・・・で、どうする？もう少しここにいます？」

それとも、あの趣味の悪い奴のところに戻る？」

「ここに決まってるじゃん・・・、もう寝る」

「そっか、じゃあもう寝ようか」

「・・・手、繋いでいい？」

「え？」

「あ、瑞樹が嫌ならいいんだけど・・・」

「僕は大歓迎だよ？正直言って、香月を抱き枕みたいにして寝たいし」

「・・・いいよ」

「え？」

「何回も言わせるな。・・・いいって言ってんだろ」

「・・・素直になつたね。ずっと素直でいてよ？」

「うん・・・」

何も言わずに瑞樹は俺を抱き寄せ

「眠れそう？」

「……多分」

瑞樹の手は頭と背中に回っている。

「……背中にくすぐったいかも……。」

「ごめん、じゃあやめる……。」

「ううん。くすぐったくても……このままがいい。」

「そっか。……香月、顔上げて？」

「ん……？」

顔を上げると、今さっきよりきつく抱きしめられた

そのせいで俺の顔は瑞樹の首筋の辺りにある。

……何故か分らないけど、俺も瑞樹の背中に手を回した。

「……香月、ちゃんとご飯食べてる……？」

「食べてるけど……？」

「へー、もつと食べたなら？細かいよ」

「……瑞樹だつて細かいじゃん？」

「僕は普通だよ？」

「まあ、普通つて言われたら普通だと思うけど……。」

「……香月。僕、絶対香月のこと守るから」

「う、ん……ありがとう」

俺の頭から手を離して俺の目の前に小指を出してきた

「……じゃあ約束ね」

「？指……切り？」

疑問と同時に顔を上げると

「ひっかかった」

と言われて、え？と思っている間にキスをされた。でも、触れるだけのキス

「!?!?・・・ちよっ!何してんの!?!」

「何って?約束のキスだけど?」

「何でそんな事っ!」

「・・・へえ、意識してくれてんだ?」

「意識してなんか・・・っ」

「だって、顔真っ赤だよ?・・・あ、もしかして風邪?大丈夫?」

と、からかったように言ってくる。

「だ、だからっつっ!キスなんかしなくても・・・」

「僕が香月のこと好きだからキスしなんだよ?あるとき克きのこと好きって言ったじゃん」

と、真剣に言ってくる。

「・・・え?あれっつて、冗談じゃ・・・?」

「・・・あの告白が冗談に聞こえたんだ?冗談なんかじゃないよ?」

そう言うくと瑞樹は俺を抱きしめていた腕を放した。

「おやすみ。」

とつつもなく冷たく聞こえた声が脳の中に響く。

瑞樹は、反対側のベッドへ行った。

「・・・どうせ俺は・・・・・・独りなんだよ、な・・・」

そう呟いて気分を紛らわしたくなり部屋を出た。・・・瑞樹がついてきているとも知らずに。

「・・・寒い。温室にでも行こうかな」

運良く寮を抜け出せたので、いつものベンチへ向かう

「・・・上着持ってこればよかった。」

そう独り言を言ってベンチに寝転がる。

寝転がると、ベンチの冷たさが体に伝わってくる

「・・・冷たい。」

そう呟くと上から何かをかけられた

「・・・誰？」

暗くてよく見えないけど、目の前に誰かがいる。

それでも返事は返ってこない

「……だから、誰？」

そういつて俺は上着をかぶったまま起き上がる

「い、しかわ……？」

そいつは何も答えずに頷いた。

「何で返事しないんだよ。」

石川は俺に訴えかけるような目で見ている。

その目を見て思い出した。俺は石川にしゃべりかけるな。って言った。

「……ごめん、あんな事言つて。独り言みたいで寂しいし……。」

「香月、お前ちょっと来い。」

そういつて、強引に俺の手を引っ張る。

「ちよっ！どこ行くんだよ！……放せ………っ！」

「うるさい、黙れ。」

そう冷たく言われ、渋々ついていった。

そこにつくと、俺の手を思いつきり引っ張って行く。

「……？部屋？」

ここは、俺たちの部屋だ。

返事もしないまま石川は俺をベッドに押し倒す。

「何……すんだよ………？」

「うるさい。」

石川は俺の手首を片手で抑えるといきなりキスをしてきた。

「………。」

何の抵抗もする気が無くなる。抵抗なんてする気分でもないし。

昔みたいに。どうせ、俺を利用するに決まっている。

最初は、友達。とか言っておいて、都合のいいときだけ友達じゃない、そんな事を言うんだ。

・・・こいつも、瑞樹も、どうせ皆一緒なんだ・・・。

そんな事を考えていると泣けてくる。

「・・・っ。俺のこと利用して・・・何がっ、楽しい・・・んだ、よ・・・っ?」

そういうと石川は目を見開いた。

「・・・利用って何だよ?」

「・・・わかってんだろ?分ってるくせに・・・そんな事言つなよ?」

「しない。・・・俺は利用なんかしない。ただ香月が好きなだけだ。それの・・・何が悪いんだよ」

「どうせ、皆そういうんだろ?最初だけなんだよ・・・。そんなこといえるの。」

俺は知ってるんだから・・・。」

「何があつたんだよ。」

「お前になんか言うか。」

「答える。」

「嫌だ。・・・お前も、瑞樹もどうせ、皆一緒なんだろ?お前達は俺の気持ちなんか分ってなんかくれない。」

「分つてやるって言ったら?」

「ありえない。100パーセントありえない。人間なんてどうせ、こんな生き物なんだよ?」

一生かかっても分かり合えないんだよ。・・・分る?」

「分かり合える。」

「分かり合えたりなんかしないんだよ・・・っ!」

俺はそういつて押さえつけられている手首の力が弱まったときその手を跳ね返して石川の顔に近づいて、そいつの顎をつかむ。

「人間なんて、一生かかっても分かり合えない。それは決まってる、所詮そんなものなんだよ？俺の気持ちなんて誰も知らない。」

気づいてもくれない。女だって言葉もすっげえ嫌い。もともと、お前の事なんかどうでもよかつたんだぜ？

はつきり言うとな誰とも話したくなかつたし

独りの方がよかつた。誰ともかかわりたくない。

人間という物自体とも絡みたくない。

強いて言うなら、家族とか親戚ならいいよ？

まあ本当のところ、家族とも絡みたくないんだよ。

そんな俺の気持ちなんて誰も知らないし、

分ってくれようもしないんだ。

お前なら分るよな？

本当のこと言うとなこれが俺の本性なんだよ？……ハハッ。

自分でもおかしくて仕方が無いよ」

そう言うて俺は、石川の隣を通り抜けて部屋を出た。

部屋から出るとそこには瑞樹が立っていた

## 21話

「・・・瑞樹、お前も聞こえてただろ？」

温室あたりから誰かもう1人いるって思ったなら  
瑞樹だったんだ。まあ、俺はこういう奴なんだ。  
だから、もう俺にかかわらないで？

・・・じゃ、そういうことだから、バイバイ」

「・・・っ。」

瑞樹は悔しそうな顔をしている。

「さてよ。」

「・・・？何？まだ何か用ですか？」

「・・・いい加減にしろよっ！」

「は？何言って・・・」

「本当はこんな事嫌なんじゃないのかよ・・・？」

本当は嫌だ。でもこうするしかないんだ。

「嫌なんかじゃない。俺にかかわるな。それも一生な

はつきり言うけど、瑞樹。お前も俺にとっては

邪魔な存在だったんだよ？そんなことぐらい分ってよね」

「・・・っ。」

また、悔しそうな顔をしている。

・・・これでいいんだ。言いたくない言葉だったけど

どうしても言わなきゃならない衝動に駆られて

あんなこと言っただけど・・・これで俺の事嫌いになっただろ・・・？

それにしても、いいすぎちゃったかな。・・・まあいいか・・・。

俺はこれ以上のこと、されてきたんだし。

俺はそれ以上に苦しんでるんだ。

それぐらい分れ。瑞樹も、石川も・・・。

## 22話

あれからというものの、先生にどうしても、って頼んでみると  
案外、1人部屋にしてくれた。

俺にとつても都合がよかったし

あの2人にも・・・よかったかもしれない。

なんだかんだ言っつて、学校にも普通に通っている。

石川とは、クラスが違うだけでも今はありがたい

ひどい事、言っつたかな・・・。

そんなことを考えながら窓の外の空を見てみると誰かに声をかけられる

「香月くーん」

そいつは何かチャライ感じだった。

「・・・何？」

「話しあるんだけど、いい？」

「・・・だから、何？」

「ここで話しくいんだけど」

「俺はここでもいいけど。」

「はやくどこかに言っつてくれ・・・。話したくないんだよ

「でも・・・。」

「何？俺はここがいいの。動きたくないし。」

俺なんて、皆から嫌われて当然の存在。

「はぁ・・・じゃあさ。」

そうつって俺の手を引っ張る。

「ちよっ・・・。」

「これならいい？」

そういつて俺を抱きかかえる・・というか  
お姫様抱っこ？ 的なことをされる

「!?!」

突然のことに俺は啞然としていた

23話(前書き)

真人くん以外女っぽい名前についてw o r z

## 23話

「何すんだよっ！降ろせっ！!!」

「だって、動きたくないんでしょっ?」

「そ、それはそうだけど・・・。」

「そうときまれば、レッツ・ゴー」

「はあっ!?!」

そいつ（名前は知らない）が俺を抱っこして

屋上へと続く道を進んでいく。

「とうちやーくっ!」

「到着じゃねえよ！何なんだよ、こんな所連れてきやがってっ!」

「いやー、気になった事あったからさ。」

なんなんだ？こいつは。俺はこいつのことを知らない、なのに友達でも

無い俺に何のようなんだ？

「・・・その前に、お前誰?」

そう、聞くと一瞬悲しそうな顔をしたような気がしたけど

元の表情に戻って・・・。

「俺？俺は神谷涼香<sup>かみやすずか</sup>。」

「へー・・・、あ。俺は・・・」

「知ってる。水原香月、16歳、誕生日は4月8日、身長は・・・もう160いったかな?」

「な、んで誕生日まで知ってるわけ？まず、身長は159センチ・・・」  
「・・・本当に俺の事忘れたのか?」

「忘れたって……？俺、お前の事なんて知らないけど……。」

「そっだよ、な……。」

「は……？何て言ったんだよ……？」

「……なんでもない。」

そっいつて悲しそうに笑う。

「……。」

その顔を見ていると、思い出したくない記憶<sup>もの</sup>を

無理やり思い出すような。何故か頭が痛くなる……。

「っ……。」

頭が痛い。意識が遠くなっていく。

## 24話

またこの夢。

俺 でも小さい頃の俺。

独りだけの世界。

でも、少し前に誰かが居る。

小さい男の子。

俺は知っている。この子を

そう、すず。確かすずって子。

<すず・・・??>

かつき?

<すずなの・・・?>

うん。すずだよ、．．．それにぼくのじいすずっておじいのかつき  
だけじゃん

<そうだったね>

そういう会話をしている。

独りだった世界が無くなる．．．筈だった。

すずが遠くに行く。

<すず・・・どこいくの??>

ごめん。ぼく、いかなきゃ．．．。いつでもぼくたちはしんゆう  
だから。

そう言って、すずが歩き出す

<まっつてー!すずっ!ー!>

追いつけない

追いかけても、追いかけても。

ほんとうにじいねえ。。。

そういつてすずは居なくなつた。



「まあ、香月が気づくまで俺は待ってるから。」

そういって、どこかに行く。

この神谷涼香が”すず”と気づくのはまだ先の話。

## 26話

今日もかわらず学校生活を送っていたけど

変わった事を言えば、あの神谷涼香がまわりついてくることだ。

「香月。」

「あー、お前か。どっかいけ、邪魔だ」

「なんだよー、つめたいな。昔とは大違いじゃん」

「つめたくて結構。その前に昔って何。」

しまった、と困った顔をしてごまかす

「いや、何でもないって。本当のこと言っても香月が多分信じないと思うし……。」

「信じるって言ったら？」

「でも、まだ言わないよ。香月が思い出すまで。」

「思い出すまでって……俺が記憶なくなったみたいじゃないか。」

「まあ、そうなんだけど……。」

そういつて、また困った顔をする。

すずもあいつと似たような顔で笑ってたよな……。

「お前、すずと同じ笑いかたしてる。困ったとき」

「そ、うなんだ……。」

すずって言うたびに傷ついた顔をする君。

すずって言葉が嫌いなのか？いや、でも傷ついた顔の中には少しだけ、嬉しいような雰囲気も混ざってる。

でも、その”すずみたい”って言う言葉に本当に傷ついていたとは知らなかった。

## 27話

あの、気を失った日から一週間。  
別に何も無かったけど・・・。

今はやばい状態だ。

またベッドに押し倒されてる・・・というか  
押し倒されてると思う。

またって言っても、今度は神谷涼香だけど・・・。

「・・・本当に俺の事、忘れたのか？」

真剣な目で聞いてくる

「だから・・・何で、俺お前の事知らないって言ってるじゃん！」

「・・・じゃあ、香月が言うすすずって奴がここに居たら？」

「居たらって・・・、そんなの会いに行くに決まってる。」

「すすずが・・・すすずから香月に会いに来たら？」

「嬉しいに決まってる・・・、てゆうか、なんですずずにこだわる

の！？お前に関係ないじゃ・・・」

「関係ある！」

怒鳴られる、怖い。こんなとき、すすずが一緒だったら。

「・・・俺たち、親友じゃなかったのかよ・・・」

「え・・・？」

「俺だけ覚えてるって・・・寂しいよな」

「・・・なんか、その・・・ごめん。」

お前がすすずだとしても、もう関わりたくない。じゃ・・・」

そいつって横を通り抜ける

・・・俺って何でこんないい方しか出来ないんだろ。

「待てよ。」

そういつて俺の腕をつかむ。

「・・・なんだよ？」

俺は情けない顔で笑っていると思う。

「・・・お前、本当にそう思ってるのか？ 関わりたくないって思ってるのか？」

「え・・・。」

「お前は・・・寂しいんじゃないのか？」

「寂しくなんか無い・・・、俺は独りの方がいい。」

「・・・なんで素直になれないんだろう。本当は独りなんて嫌だ。なのに・・・！」

「素直になれよ。」

そういつて俺を抱き寄せる。

何で、こいつは・・・俺のことがわかるんだよ。心を読まれてるみたいじゃないか。

「・・・何で。何で判るんだよ。・・・何で俺の気持ちができるんだよ！」

「親友だから。俺と香月は親友なんだろ？」

「・・・そうだけど。」

「これだけは覚えておいて。俺と香月は・・・いつでも親友だから。」

僕から俺にかわった”神谷涼香”

俺の事をいつでも親友って言ってくれる”すず”

神谷涼香は・・・すずなんだ。

「すず・・・。。。」

「・・・ん？」

「親友って本当？ いつでも親友なの？」

「ああ、親友だよ」  
「そっか・・・。」

28話(前書き)

多分、香月くんキャラ崩壊だw

## 28話

神谷涼香「まず

とわかってからというものの

俺はまずにベツタリ。

というか、ひつつき虫みたいな感じ。

すずだけには正直になるって決めたから。

何か変だけど、すずがいてくれたら友達とか要らないって言うか・  
・。

「香月。」

「何ー？」

「昼、屋上な」

「オッケー」

屋上でお昼かぁ・・・、寒くないかな。

まぁ春だから調度いい気温かな

ボーっとしてたらいつの間にかお昼になっていた

「もー、昼か、早いなあ」

「香月、全然授業聞いてなかっただろ。」

「うっ・・・何で・・・それを・・・」

「ちゃんと授業聞いてないとバカまっしぐらだぞー」  
バ・・・バカだと!?  
「なっ!・・・バカってなんだよー」  
「じゃ、屋上行くぞー。」  
と言って走り出した。  
「待てよーっ!」

「すずーっ!」  
「おー、ついてこれたか」  
「何だよ、体力無いつて言いたいのか?」  
「うん」  
「即答かよ」  
「つべこべ言わずにー」  
そついうとすずは俺を軽々と抱き上げた  
「ちよっ!何すんだよ!皆見てるって・・・!」  
恥ずかしすぎて顔が真っ赤になって手で顔を隠す  
「顔真っ赤だぞー」  
何楽しんでやがんだよっ・・・!

「へっへーんだっ。こっちまでおーいで」

クソ・・・ッ！完全になめられてる・・・！！

「言われなくても行く！」

そういつてすずは走る。

俺も走るしんどくならない程度に。

やっと追いついてすずの背中に抱きつく

「速いつて・・・っ！」

「えー？そうか？」

「そっだよ」

そう言つて、すずの腕を両手で掴んで睨んでやった。別に怒っては無いけど

「まー、そんなんどうでもいいじゃん。飯だ、飯。」

「うん。」

俺は腕を掴んだまま隣を歩いていた。

すずの顔からそのまま視線をずらすと目に映ったものは・・・。



### 31話

先に口を開いたのは俺。

「何だよ。」

「へえー、随分と態度が違っただねえ」

「……、確かにそうだけど。」

「お前らには関係無い。」

「関係あるよ。」

やっぱりこういう状況とか嫌いだ。

「俺……は、……俺はすずしか信じないって決めたんだよ。口出しかそういうのやめてよね」

「僕、香月を守るって言っただじゃん。」

「守ってない。守れてない。結果俺が嫌な思いしかしてないんだよ。……それに比べたらすずは俺の事分ってくれてんだよ。俺の事を知ったふうにいるな。……俺が信じるのはすずだけだ。」

「ふーん、立派な口利くようになったね」

重い空気が流れてて気分が悪くなる

「……だからっ！俺はもともとお前達の事なんて友達とも思っ  
てなかったし！お、俺を……俺の事を一番分ってるのはすずだけなん  
だよ！お前も分ったような口利くな！」

俺はこれ以上ここにいるとおかしくなりそうで屋上を飛び出した。

屋上を出て、階段を下りて……すぐ歩いた所にすずが立っていた

「すずっ！……俺もう嫌だよ……こんな所居たくない！」

すずの胸に顔を埋めながら言う。

「しょうがないなあ……。目、つぶ瞑れ。」

「……何をするかは分らないけど……すずの言う事なら。」

俺は目を瞑る。

・・・すると。

「え！？何してんだよ！」

「大丈夫、目瞑ってて。」

俺は・・・おんぶされてる？

まあいいか・・・歩くの面倒くさいし

### 32話

気がつくとすずが隣にいた。  
どうやら俺は寝ていたらしい。

「あ……すず、俺寝てた？」

「……………」

返答が無い。

「すずー、聞いている？」

「……………」

何だよ無視とかひどいじゃん。

「すずー、聞いーてーるー？」

「……………」

「無視すんなよー。」

「……………」

なんだよこいつ！

「…………俺もまた寝るから起こせよ、すず。」

あれから何十分経っただろう……。

…………寝れない。

寝れない、寝れない、寝れない、寝れない、寝れない……！！！！  
寝れねえよ！……こうなったら狸寝入りでも…………っ！

総思った時隣ですずが動いた。

やべえ・・・ばれないかな・・・。  
てか、なんでばれないようにする必要が・・・まあいいか。

### 33話

「……………あー、よく寝た。香月い？」

「……………っ。」

見つからないようにしなきゃ……………。

「起きてんだろ、香月。」

「……………。」

無視無視！寝ないと……………でも寝れないっ！

「……………ま、いつまで我慢できるか、だな。」

はあ……………？何言ってるんだよコイツ……………！

無視だ、無視！

いきなりさすが俺に抱きついてきて……………！

（や、やめるよーっ！）

くそっ！心の中でしか叫べねー

するとすずの手が服の中に入ってきて

「ちゃんと飯食べるよ、香月。……………お前も小さいなあ」

すずの手が服から出て行って、少し安心する。

でも、今度は服の上から触ってくる

（……………何だよこいつ！）

ふいに手の動きが止まる

（今度はなにをするんだよ……………）

すると急に耳に息をかけられた！

（っ！？……………く、そ……………こいつ俺の急所を狙いやがって……………！）

そうだ、俺は耳が弱い。それをすずは知っている。

(あ・・・こんなことされるなら返事しておけばよかった・・・っ！)

### 34話

すると急にすずは俺の耳に口を付けてきた。

「うっ……。」

(……声聞こえたかな……。……。)

「香月も頑張るな。……でも次はどうかなあ?」

俺の耳に近くて。声も熱っぽさがあつて。

俺は内心ビツクリする

(……なんだよ、これ、すずかよ。)

すずはフツと笑ってから耳に口を付けてから  
耳を舐めてきた

「ひ、あっ……。」

(あ……、俺ノノノ)

「ビーンゴ……さーて、香月くん?起きてるんだろー?」

「……。」

「何?また……して欲しいわけ?」

(う……。……。)

「……何だよ。」

「もー、何で返事しないかな。」

「……別にいいじゃん。寝たかったけど寝れなかったし。つか、  
お前何してくれてんだよ!俺の耳に……!ノノ」

すずはすこし黙って

「……いや、耳弱いだろ?だから起きると思つてた。」

「なんだよそれっノノ」

(うっ……ノノノノ恥ずかしいよう……。)

35話(前書き)

会話文多い・・・(汗)

### 35話

「……でさ、あの人たちって誰？」

「あー……あの人達？別にすずには関係ないよ。」

（すずに心配とかされたくないし……こう言っておくのが一番かな……。）

「……関係ない訳無いじゃん。」

「何で……」

「香月の事だし、何かあったんでしょ」

（なんだよ、すずは何でこう……俺の事分るんだよ……）  
「……」

「なんかあったんだろ……？」

「まあ、色々とね」

絶対ここで言ったら気まずくなりそうだし……

「俺には話せない事？」

（なんだよ……、言葉攻めかよ。）

俺が返答に困っていると

いきなり俺の耳に息を吹きかけてきた

「ちよっ！何す、んだよ……っ！」

「言つか、言わないか？」

「くそ……っ、言えばっ……いいんだろ！」

（うっうっう……やってしまったよ、クソッ！すずめ……！）

「でー？何があったの」

「んー、まあ。元々はうん。まあね……うん。」

「うんだけじゃわかんねーんだけどオ？」

「んー、いろいろ変な事に巻き込まれた、的な感じ？」

「変な事って？」

(・・・どこまで聞くんだよ)

「んー、俺は別にそんな気は無いけどさ、何か俺の事好きだ  
って言い出すんだよ。あの二人」

「ふーん。で？香月はどう思ったわけ」

「・・・別に。嘘だっと思ってたし。でも・・・俺の気持  
ちも知らないで変な事してきたし。」

「二人とも？」

「・・・うん。あ、別にまじで変な事とかそう  
いうのじゃないけど・・・」

「じゃないけど？」

「何だよ・・・言えばいいんだろ。はぁ・・・キス  
されました。2人に。これでいいですか！？」

(何でこんな事言わせるんだよ・・・俺の身にもなれよ・・・！)

### 36話

「ふーん……で？それに対して香月はどう思ったわけ？」

「どう思ったって……」

（どう思ったって聞かれても俺は別に好きな相手でもないし……嫌だったけど……）

「……嫌とか、そいつが好きだったから嬉しかったとかあるじゃん？」

「う、嬉しくなんか無いってっ！……！」

あ……俺は思わず叫んでしまった。

嬉しくなんかなかったし。

「ふーん……」

俺は苛立ちを隠せなくなって……

「なんだよっ！そっちから聞いてきたんだろ！？ふーんで終わらせるつもり！？」

「じゃあ、何すればいいんだよ？俺がお前にキスでもするか？」

「何でそうなるんだよ！？」

「お前がそれで終わらせるつもりかって言っから言っただけだ」

「っ……！！」

俺が言い出したことなのに、胸が苦しくなる。

喧嘩とかそういうのやりたくなかったのに……でも俺が言ったから……。

「……ごめん。」

俺はそう言ってベッドから降りて、すずの部屋から出て行った。

俺は何もすることがなくて。

何をしようか考えてると、一つだけ思いついた。

温室。瑞樹が教えてくれたけど何だかんだいって俺は気に入ってる。

あそこはリラックスできるし、落ち着くにはもってこいの場所だ

俺は少しだけ敷地内を歩いてから温室に行った。

そこには……………。

### 37話

瑞樹が居た。

あちらも俺の方に気がついたらしくて。

「・・・香月じゃん。」

今さっき俺があんなこと言ったのに何で話しかけてくるんだよ・・・

「先、輩・・・。すいません、邪魔しましたね。」

そういつて俺は温室から出る。

・・・何だよ。俺が入った所に居るって・・・

俺はまた敷地内を少し歩いてから

俺も行ったことのない池に行った。

俺は池の近くに腰を下ろす。

・・・ここはなんだか落ち着く、なんでだろ。

そついやお医者さんに言われてたんだ・・・。

『精神的な面でも、これまでであった事を考えると一人の時間などがあれば落ち着くと思います』

・・・確か小さいころにそんなこといわれたような気がする。

少しの間池のほうをボーっと見ていたら

後ろで”ガサ”と物音がした。

びっくりして俺が振り返るとそこにはさすが居た。

「すず・・・！！」

「やっと見つけた・・・香月。」

・・・見つけたって、何で？俺にはわからない。

俺はずすと口喧嘩とかした事なんか一度も無かったから  
どう対応すればいいのかとかわからなくなってしまった。

「・・・俺、もう行くから」

すずの隣を通り過ぎていく時また胸が苦しくなっていく  
するとすずは俺の腕を引っ張る

「何だよ・・・。」

そういつて振り向く、すると

すずの顔は少し動いただけで俺とキスが出来るぐらいの距離にあって  
顔がどんどん赤くなっていく

「なっ・・・何！・・・すんだよ・・・」

語尾になるにつれて声が小さくなっていく。

「香月、顔赤い。」

（わかってる・・・、けどそれはすずが・・・）

すずの視線につかまって動けなくなる。

すずはフツと笑ってから俺にキスをしてきた  
抵抗したいのに体がいうことを利かなくて。

そして唇は離れた。

「・・・抵抗しないんだ？」

すずがそういつて、俺はまた顔がカツと赤くなる。

「うるさい・・・。」

そういつて俺はずすの横を通り過ぎて行った。

途中で俺は走りだし、そのときにふと思った

なんで抵抗しなかったんだろう・・・しかも

しかも、すぐ相手に何であんなにドキドキするんだよ・・・！

最近なんか俺おかしいかな・・・。

すでにキスされていたところを誰かが見ていたなんて思ってもいなかった。

### 39話(前書き)

香月くんとすずって同じ部屋の設定にしたような気もするけど・・・  
よし、気にしないでおこう！

( いい加減でごめんなさい・・・ )

その次の日俺は熱を出した。

俺は今、すずの部屋に寝泊りして

俺の部屋は使ってないし、もうすずの部屋に行くのが当たり前になつてきている。

すずの部屋にいるけど、昨日あんなこと（キス）をされてから頭がボーっとして、すずが何を聞いてきても返事はほぼ曖昧だった。するとすずがこんな事を言ってきた

「香月が休むなら俺も休む。」

・・・はあ！？こいつ、すずは何を考えてんだ！?????

俺が休むからすずも休む？ふざけてるんじゃないよ！

しかも昨日あんなことされたし、なんかまたされたらどうすればいいかわかんねーじゃん！

・・・あ、今思ったけど俺、熱出してるじゃん！

フッフッフ・・・俺ナイス！

熱でてるしキスなんてされねーよなっ！

ハッハッハッハ、ざまあ見ろすず！！

俺がそんな事を考えていて顔が笑っていたのか

「何かおかしいことでもあったか？」

そんな事を聞かれて、つい口が滑すべってしまった。

「アハハ、だって、俺熱出てるし昨日みたいにすずが俺にキスなんてできねーじゃんっ！」

数秒たつて気づいた

「あ・・・ゴホッゴホッ。い、今は・・・」

すずの瞳めが獲物を捕らえたかのように奥で光っている。

・・・やってしまった。何で俺ってこんなにおっちょこちよいな

んだよっ!!

「俺にキスされるって思ってた……わけ？」

「う……」

いや、その前に、『わけ？』って何??

昨日したじゃん!俺に!!

するとさすが

「ふーん、して欲しかったんだ？」

俺は慌てて返事をする

「なっ!俺はそんな事言っ……っ!!!!!!ゴホッゴホッ……

あ”……のど痛<sup>いて</sup>え……。ゴホッゴホッ

俺、大丈夫かな。体弱いのに……。

「ハア。」

俺はため息をつく。「もう俺疲れたから寝る。」と一言だけ言っ

俺は眠りに落ちていった。



## 40話

俺は目が覚めてから「気分転換に外に出たい」とすずに言ってから部屋を出た。

今は学校（授業）がある時間だし、温室には誰もいないだろうと思っていた俺がバカだった。

あの時外に出ていなかったらあんなことにはならなかったと言うのに。

少し歩いて温室に向かった、運良く誰も居なかったのだ

（というより、学校（授業）がある時間だし、いなくて当然なのが）

俺は温室にあるベンチに寝転がっていた。

すると誰かの足音が近づいてきた・・・が俺は無視をすることにした。

先生だったら気分転換って言えばいいだけだし。

「・・・おい。」

その声には聞き覚えがあつて。俺が今一番会いたくない奴だったのかも知れない。

顔を見るのが怖かった。でも、逃げ出してちゃダメなんだ・・・と思う。

「・・・はい。何ですか・・・俺に何か用でもありました？」

俺は平然を装って返事をする、でも、かすかに声が震えている。

本当は脳内がゴチャゴチャになっていてなんて言葉を返せばいいのかも分らない。

・俺が今、唯一堅固で話してると言えば一人しかいない。  
瑞樹……。

「……まだ敬語で話す……か。」

「先輩ですし……当たり前だと思えますよ。」

「この前まではタメ口だったのに？」

「っ……、それより何で先輩がここにいらっしゃるんですか。」

そう、まずはそれが疑問だった。話を無理やりそらしたけど……。

「ふーん、話をそらすなんて、いい根性してるよね。まあいいけど。」

僕がここにいるのは……。

僕のため……って言った方がいいのかな？」

……瑞樹のため？何かここにきて得があるのだろうか？

## 41話（前書き）

テスト終わりましたー

もう開放されましたよwあの紙つぺらからw w w

うれすいw w w w

今おもいましたが香月くんは天然なのでしょう？

考えている事がすごくかわいいような、幼稚なような・・・。

## 41話

・・・もしかして瑞樹は温室に植物を見に来た・・・のかな。

「・・・じゃあ俺、邪魔ですね、温室に植物を見にきたんでしょ？」

「？」

「いつつも瑞樹は温室に居るのだが、そう思うのは俺だけだろうか。」

「そう一言言つて俺は瑞樹の隣を通り過ぎる」

「待てよ香月。」

「・・・何ですか。俺にまだ用でもありますか？」

「隠れてないで出てきたらどうだ？お二人さん」

「二人？今ここに居るのは俺と瑞樹だけじゃ・・・。」

すると周りからガサツと音がしてそちらのほうに振り向くと  
「まずと石川が居た。」

「（まず！？何でお前がここに・・・。）」

「チツ、見つかったか。瑞樹ってなんでそこまで勘が鋭いんだよ。」

「・・・はあ？瑞樹？石川が瑞樹の事を瑞樹ってよんでる！？」

「え・・・？何で？何で何で・・・！????」

「・・・真人、お前・・・。あー、もういい、・・・はあ・・・  
面倒くせーな。」

「・・・何がなんだかわからない。」

俺が口を開いたまま閉じてなかったらしく俺に気づいた瑞樹がこう  
「言ってきた。」

「あ、僕たち兄弟だから」

「・・・はい？」

「いや、だから、兄弟だって、僕と真人は。」

「……ん？…兄弟……」

「うん。兄弟」

「はあああああ！？兄弟？…え、でもさ、石川と瑞樹名字違うじゃん……」

「……義理の兄弟って言えばいいかな？」

「……はあ？……もう、何かわからないよ……」  
俺はハアとため息をつく

さすが話の内容に入ってきてなくて、俺はちょっと気になったけどいいかな……って。

そしてさすが急に俺の手を引つ張って。

「え……？！？ちよっと！」

そのまま俺は部屋の部屋まで連れて行かれた。

「……何だよ。」

俺は不機嫌ながらもすずずに聞く。

さすが何も言わないから俺はいったんすずから離れようとした。

するとすずは俺を壁まで追い詰めて押さえつける

ハア……なんでだろ、こいつと仲良くなってからこいつのがたまにあつて……

どこが悪いとか……いや。違うか。

俺は無言のまま俯いてすずの顔を見ないようにする。

……あ、もしかして今さっき話してた中に入れなかったとかそういうので怒ってるんじゃないの？

「……すず、もしかして今さっきの事で怒ってる？話に入れなかったとか……さ？」

「違う。」

「じゃあ……なんだよ。」

「お前さ、俺の事どう思ってるの？」

「は？何だよ、急に。どう思ってるって、普通に”友達として”好きだけど？」

「……」友達として”ねえ……」

「……何？」

「……いや、なんでもない」

そういつて俺から離れていく。

……なんだよ、機嫌直るの早いのか？

……いや、違うか……。

でも何さ、あんなにコロコロ表情とか変えてさ。

すずにちよつと不満を持ったけどあえてそこは気にしなかった。

## 42話(前書き)

更新ストップしててすいませんでした^^;  
いろいろと時間が無くてかけないのですが  
これからちよつとずつちよつとずつ書いていこうと思います  
よろしく願いますorz

## 42話

今は夜。

あれから何時間たったか分らないけど  
すずとはまだ話してない。

「……………」

声をかけたたくても勇気が無くて……………。

俺ってきつと弱虫に違いない。

きつと弱虫なんだ……………。

…今は関係ないか。

声……………かけてみようかな……………。

「……………すず」

「……………香月」

2人の声が同時になつて俺はあたふたしてしまつ。

「……………すず、先言えよ。俺はいいからさつ……………!」

「いや……………お前言えよ。」

「すずが……………」

「香月が……………」

「……………じゃあ、じゃんけんで決めようよ!負けた方が先に言つ!」

「わかつた」

「「じゃんけん、ぽんツ!」」

「……………」

負けた、言いだしっぺの俺が負けた……………。くそおおお。

「言いだしっぺのくせに負けたな。」

「・・・言えはいんだろ？言えよ。」

・・・言えはいいつて言ってるけど。  
なんていつたらいいだろ・・・気分で？

「・・・なんで俺すずの事呼んだんだろうな。気分・・・  
・・・とか？」

「・・・疑問系かよ。・・・気分かあ・・・、じゃあどっちが  
負けても一緒だったな。」

「一緒って・・・。」

「俺も気分で呼んだだけ。」

「・・・何だ、変に緊張した俺がバカみたいじゃん。」

・・・？なんか俺変な事言ったような・・・言っていないような。  
深く考えないでおこう、多分変な事言ったらすがつつかかって  
くるもんな。

42話(後書き)

次回に続く。

#### 43話(前書き)

更新stopしてて本当にスイマセン・・・。

はつきり言つとこの小説の更新のことがすっかり頭から抜けていました・・・。

塾にも入ったので更新率下がると思ってますが

どうか許してやってください・・・orz

お気に入り登録してくれている方や見てくれている方、申し訳ありません；

## 43話

そんな事を思つてすすの方を見ると

すずの顔が赤くなつていて見ている自分がびっくりした。

「すずどうしたんだよ……?」

「……お前のせいだ」

俺のせい??

「……ごめん。」

「あ、いやそういう意味じゃなくて……あ————、落ち込むなよーっ」

「そういう意味じゃないって……じゃあ何だよ……」

「それは……」

「何だよ、俺には言えないのか」

「いや、言えない訳じゃないけどさ……」

「じゃあ、教えてくれてもいいじゃん」

「……じゃあ、キスしてくれたら教えてもいいかな」

「は!?!」

男の俺が?男に?キス?

なに考えてんだ?しかも何で俺が……?

「するか、しないかどっち?」

「そんなの……俺は男だぞ?何ですずにキスなんかしなきゃならないのさ!」

「お前だから……」

「はあ?俺だから?なんだよそれ!」

何か俺はこれ以上問い詰めたら……

なんて思つたりしたからすすの部屋を出て行った。

やっぱりいつもの温室。

瑞樹が教えてくれた場所・・・ってことはきにしてないけど結構お気に入りなのだ。

春ということもあって、気温が調度よくうとうととしているうちに俺の意識は糸が切れるように遠のいていった

## 43話(後書き)

遅すぎるけど最近夏目にはまってきたw

#### 44話(前書き)

今度はNLで小説始めようかと思っております・・・。  
そして、小野Dの熱烈answerにハマっているという真実

## 44話

目覚めたとき俺は暗い部屋に居た。

ここはどこだろうと辺りを見回してみる

(ここは……寮の部屋みただけどすずの部屋では無さそうだしな……)

どこからか知らないが”ガタ”と音がした。

「……誰？」

返事を待ってみるが返答はない

ふいに”ニヤー”という声が聞こえて猫だということが分る。  
俺はベッドから降りて猫のそばに行く。

俺は猫を抱いて頭をなでてみる。

気持ちよかったのか喉をゴロゴロと鳴らしている  
それがかわいいので勝手にタマ(仮)と名づけた。

しばらく頭をなでてやっている

急に俺の腕から飛び出していったので猫を追いかけてみる

「おーい、どこにいるんだよ、タマー(仮)」

44話(後書き)

(次回に続く)

## 45話

すると向こうの方から足音が聞こえてきた。

俺はとっさに身を隠したが、俺の脚が見えていたのだろうか。

「誰？」

「……こつちが聞きたいよ。とも思ってしまうが

もしかするとこの声って……」

「ねえ、誰？」

瑞樹だ。

寝ている演技ぶりでもしておこう

俺は頭を体育座りをしたひざの上において寝たふりをする。

気づかれない事を祈っておこう。

そんな事を思っているといつの間にか寝ていたのか、俺は目を覚ますとまたベッドの上にあった。

「んー……」

辺りを見回してみる。

「起きたのか。」

瑞樹の声が俺の真後ろで聞こえる。

「……夢、か。」

そう言っただけ俺は布団をかぶった

## 46話

「夢じゃないよ。」

「なんだか機嫌きげんが悪そうに言ってきた」

「何で機嫌悪いのさ」

「って・・・そんな事言ってる場合じゃないよなあ・・・」

「瑞樹だし・・・悪い事だっているいろいろしたし・・・謝った方がいいのかな・・・」

「お前が・・・」

「やっぱり、俺のせいだよな、俺めちやくちや悪い事したし・・・」

「んーっと、じゃあ、僕にキスしてくれたら許すよ。」

「そういつて瑞樹は自分の唇に人差し指をあてる。」

「キ・・・スって・・・なんで。」

「う・・・、また嫌なこと思い出しちゃったな・・・」

「香月が好きだから？」

「・・・好きだからって言ってるんで、俺が瑞樹にしなきゃいけないんだよ・・・仮にも俺達男なんだし・・・」

「いや、待てよ？俺って・・・すずの事好きなんだよね。多分、男同ホ士だよな？」

「神谷くんなら言い訳？」

「・・・何で」

「当てられるのが怖かったし、認めたくなかった。」

「俺とすずは友達同士なんだって、だから・・・」

「だって、香月って神谷くんといるときが一番楽しそうだし・・・好きなんでしょ？」

「何が・・・？」

「神谷くんの事」

「何で？」

「好きなんでしょ？認めたら？」

「好きじゃ……」

何で……俺はその後をいえないんだろう……。

それに瑞樹がおかしい。瑞樹はこんな人じゃない……もっと優しいし……。

「好きなんですよ？見ててこっちが嫌になっってくるんだよねー、早く認めてくれないと俺達が疲れるんだから。」

何で？……俺のせいで。

俺のせいで皆が……。

「ご、めんなさい……。」

## 47話

頭の中で俺であって、でも俺じゃない「誰か」が頭の中で意見を言い合っている。

嫌だ、やめてよ。

何で俺が攻められなきゃいけないの？

俺のせいなのか？俺が悪いのか？

何で？

俺は何したんだよ？

俺が悪いんだ？

やめるよ。そんな事言われたらまた俺はみんなの前からいなくならなきゃいけないのか？

頭が痛い。

俺は何をしたんだろうか

俺は……。

そこで俺の意識はなくなっていたらしい。

目が覚めると白い天井。

ドコなのか分らない。

そんな事を考えていると向こうの方からドアがあく音がした

## 48話(前書き)

ごめんなさい、1ヶ月ぶりの更新です。

今日は熱があって学校休んでいます。

2回ぐらい更新できたら嬉しいと思っています

## 48話

俺の方に近づいてくるのは

・・・瑞樹だ。

俺は知らないうちに目をそらしていた。

「昨日の質問、忘れたわけないよね？僕は早く答えて欲しいんだけど」

・・・まただ。何で俺を攻めるんだよ・・・。

「・・・やめて」

「何？」

「やめて・・・なんで？何で俺が・・・やめてよ」

「は？何のこと言ってるの？」

- 何で。何で？何で俺が攻められなきゃ・・・いじめられなきゃいけないの？

- 答え、俺の存在がジャマだから。

- 皆俺のことが嫌い？

- 答え、嫌い・・・。

そつだ、俺が消えればいいんだ、ここから。

そつだよ、違つ所にいけばいいんだよ。

そつだ、それが一番いい。

どこに行こうか。どこがいい？

俺はどこでも良い、でもできるだけ遠い所に。

そつだね、ソレが一番いいや。

## 49話(前書き)

えー、47・48話の内容を思いつきり変えましたので  
47から見ていただくといいと思います

## 49話

俺は夜になってから保健室を出て  
自分の部屋・・・寮の部屋に着いた。  
荷物をまとめる。

後は朝になって退学届けを出せばそれで終わり

「だったはずなのに。」

何だよ、何でお前がここにいるんだよ。  
何で・・・。

「今から何しようとした？」

俺は目をそらす。

何でこいつが俺の部屋に。

こいつにも迷惑はかけたくなかった。  
だから、気づかれずにここから離れようとしたのに・・・  
どうしてお前が・・・さすがココにいるんだよ。

「何で？」

「それはコッチのセリフなんだけど」

「どいてよ・・・俺行かなくちゃ行けない。ここにいたら・・・」  
「どこに行くんだよ。」

「そんなの聞いたって別に得なんかないじゃん。」  
「教える」

「・・・そんなの決まってない。どこかにいくよ。ココからすぐく離れた所に。だからどいて・・・」  
『皆』で出した意見なんだから  
ら

そう、これは『皆』で出した意見。

俺と『皆』が出した意見。

俺の経験から。

だって皆俺がいなくなるって分ったら喜んでたから。

先生も。

・・・懐かしいな。

そうだ、先生もグルだったんだ・・・

でもそんなのは昔の話。

親が俺のこと心配して引越したけど。

でも今回は自分で決めた。

誰の力も借りずに・・・

『皆』<sup>みんな</sup>で・・・

## 50話(前書き)

書いていた文章が2回も消えるというナンという悲しさっ！  
でも俺はめげずに頑張る！！

「皆ってだれだよ」

「『皆』……？それは言えない。だって……」  
俺、だから。

『皆』ってというのは俺であって  
俺ってというのが『皆』

こういうのは多重人格というのだろうか。

でも、すずには知られたくない……。  
すずだからこそ、知られたくない……。

「だって、何？……もしかして、お前また昔みたいに……」  
俺はすずが言い終わる前に言ってやった

「は？そんなわけねえだろ？何勘違いしてんの！？仮にももう高校生なんだぜ？そんなことする奴いるのかよ……」

でも、と俺は続ける。

「お前のそういう所、鬱陶しい。止めてくれない？」

その一言ですずがすごく傷ついた顔をした。

「……なんだよ、その顔、やめろよ。俺が悪いみたいじゃん」  
実際俺が悪いけど……、でもこうでもしなきゃすずは聞いてくれないだろう、と思つての判断だ。

「香月、お前それ本気で言つてんの……？」

今さっきの傷ついた顔のままずっと俺に聞いてきた。

## 51話(前書き)

香月くんがやさぐれてるといっか・・・。

ああああああああ

内容がわからなくなってきた

どっとうぶうにかけばいいかわからなくなってきた。

変な内容だけど読んでくれたらうれしいですorz

## 51話

「本気だよ？俺、お前に嘘言ったことあったっけ？」

「まずには嘘をついたことが無い。  
これが初めてだ。」

「今のお前は嘘、ついてる」

「何で、何で分るんだよ」

「そんなのどうやったらわかるんだよ」

「お前が嘘つくときは……。」

「何だよ、俺が嘘つくって何でわかるんだよ！」

「それは……。」

「何？俺には言えないわけ？」

「俺は嘘つくとき何かしてたか？」

「何？何をしてんだよ……？」

「お前、泣いてるから」

「一瞬どつという意味が分らなかつた。」

「だけど、よく顔を触ってみると確かに自分の涙で濡れていた」

「……っ！うるさい！！俺は……俺は……俺は……の事なんか……」

「！」

「次の言葉が出なくなった。」

俺はすずのことをどう思ってるんだ？

好き？嫌い？

・・・どっちなんだよ。

「なあ、香月。」

「・・・なんだよ」

「俺の事、好きなのか嫌いなのか・・・はつきりしてくれよ」

「俺はすずの事なんか、好きじゃ・・・っ！」

ない？

それとも好き？

俺はすずの事本当にどう思ってるんだ？

## 52話(前書き)

すずがまさかの告白!?!?ですww

パンダヒーローをこえ部で熱唱して、失敗しまくったために喉が痛いですorz

## 52話

「はつきりしろって言うてるだろ!？」

「・・・っ」

さすが怒ったの、初めて見た。

何で、

「皆、俺の事、ばっかり・・・何で、そんな事、言っただよ・・・」

何で、俺はこうもマイナス思考なのだろうか。

おかげで頭が痛くなってきた。

「おい、かつ・・・」

「やだよ、何でみんな、俺の事なんかかばうんだよ。俺なんかどうなったっていいじゃん・・・っ」

だんだん悲しくなってきた

自分でもこういう性格は嫌だと思っているけど

性格ってやっぱり、すぐに直せるものじゃないし。

そもそも、皆俺の事友達みたいに扱うからいけないんだ

結局は、俺が苦しい思いをしなきゃいけないだよ。

瑞樹も、石川も、すずも、皆のせいだ。

俺は悪くない。俺に構うから俺がこんな思いをしないといけないんだよ・・・。

「泣いてても分らないんだけど。香月・・・俺に話せ、何があったか。」

「やだ、言いたくない。何も、何も言いたくない。こないでっ！」  
「香月」

こないで、って言ったのにまだ、近づいてくる

「こないでっっていつてんじゃん！」

それでもまだ近づいてくる

「くるなって言ってるだろうっ！？俺に構うな！……ここから出て  
行け！！」

「嫌だ」

「じゃあ、俺が出て行く！……そこどいて！」

「嫌だ」

「どけよ！」

「何で」

「お前には関係ない！」

「ある」

「なんでだよ」

「俺がお前の事一番知ってるから、……お前の事が好きだから」

最後の一言に俺の思考は一瞬止まった。

「……何言ってるの？お前が……俺が好き……？」

「そっだ」

「友達としてだろ……？」

「違う」

「じゃあ、なんなんだよ……！」

「友達なんかじゃない。俺はお前の事ずっと好きだった。守ってやりたかったんだ」

「守るって何だよ……。俺は子供じゃない、心配される必要はない……！」

そっだ、守られる必要なんかない

## 52話(後書き)

何か、香月の性格と俺の性格が似てるようなきがしてきた・・・。  
俺、マイナス思考だし。tk、香月とおんなじこととかおもったこ  
とあるし えw

ぬぬぬー、自分の性格とめっちゃにてるー。かぶせたのだろうか・・・。

### 53話（前書き）

皆さん、お久しぶりの更新でございますよ〜  
楽しみに待っていてくれた方（いるのか？）、待たせてしまって申し訳ないです・・・orz

PS、小説の文章の書き方とかかわりまくっててすいませんorz  
オトンにちよくちよく見られるから怖いわぁwwww  
ではー、始まり始まりー。

## 53話

そつだ、俺は子供なんかじゃないんだ・・・！

「馬鹿にすんじゃねえよ・・・、お前は俺の気持ちなんて分かるはずが無いだ・・・。」

「俺には・・・分かる」

「・・・っ、何でなんだよ！どうせ人間なんて他人の心が分かることなんて一生ないんだよ！」

人間なんて所詮、人の本心なんて分かるはずがないんだ  
分かられてたまるか・・・！

俺は万が一の時に備えていつも胸ポケットに折りたたみナイフとか  
危ないものがチャッカリと入ってる。

それを胸ポケットから俺は出した。

### 53話（後書き）

折りたたみナイフW高校生がこんなもん持ってるいいのか・・・！？  
まあ、昔いろいろされてたしその恐怖心もまだのこってるわけで・・・。

ってカンジWWW

お母さんがうるさいので今日は落ちます・・・。ノシ

## 54話(前書き)

またまたお久しぶりです。更新してなくてごめんなさいです

と、いうより折りたたみナイフってDRRRのイザヤちつくですよ

ねー・・・w

ネタが思いつきません、投げやりでごめんなさい。

文章力なくてごめんなさいですorz

がんばります

## 54話

「香月……何だよ、それ。」

「見て分からない？」

「すずはすごく驚いた顔をしている、当たり前……か。親友だとおもってた人にこんな事されるんだもんなあ。」

「すず……悔しい？」

「……」

「すずは何も言わずに俯く。」

「……悲しいの？ 苦しいの？」

声が震える、別に怖いわけじゃない。笑えてくる。

今まで俺が味わってきた気持ちを思い知ったら良いんだ。

悲しい？ 苦しい？ だったらもつともがけばいい。

苦しめばいいんだ。

「……うるさいっ、お前は自分だけが苦しいとでも思ってるのか！？」

「っ……、何だよ、何も知らないくせに……知ったふうになんじゃねえよ……」

「知らなくなんかねえよ！俺がどんだけ苦しい思いしてきたのか……っ」

「すずが俺の胸倉を掴んで訴えてくる。」

「お前はいつもいつも自分が傷ついてたとも思ってたのか？」

「思ってるさ！お前は俺の中学の頃を知ってない！俺がどんな目にあったのかも！」

「お前は知ってるはずねえんだよ……！！」

54話（後書き）

ノッカーウ

うたプリネタすみません

ああああああ

香月くんノッカーウ W W W

次もこの調子で書きます。

ネタを忘れないうちにW W W

## 55話

「……………ってる」

「……………何？」

「知ってるって言うてんだよ……………」

「知ってるはずがない！俺とお前は違う中学で……………」

「そうだ、俺とすずは違う中学で……………」

「一緒なはずが無い。そんなのありえない」

「すずだったら俺の事助けてくれるもん……………」

「小さい頃から俺の事守ってきてくれたから……………」

「助けてくれて……………」

「……………！」

「思い出した……………」

「いた……………すずは……………いた。」

「一つ上の学年に、いたはず。」

「なのに、なんで俺は気づかなかった？」

「名前も知ってた、何で？」

「じゃあ、なんで俺と一緒にの学年にいるんだよ？おかしいだろ？」

「……………なんでだよ」

「何が？」

「何で？何で……………？知ってるなら……………！」

「……………」

「すずはすごく悲しい顔をしている。」

「こんな顔させたいわけじゃなかったのに……………」

「これ以上俺を傷つけないで？すずのその顔が一番傷つくから……………」

「やめて……………、やめてよその顔」

「……………ごめん」

「やめろっていつてんじゃん……!」

やめろ、やめろ、やめろっ!!

俺はどうしたらいい?……何も知らない。

すずはいつもどうやって俺を慰めてくれた?

……思い出せない。

何で?何で思い出せないんだよ。

「何で……、いやだよ。やめて……嫌だ……」

「お前……なんで泣いて……っ」

すずが苦しそうな顔をする

「やめて!泣いてなんか……!嫌だ、やめてよ!」

自分で何を言ってるのか分からない

いろいろな感情がいつぱい出てきて

何を言えばいいか、わからない

「やめてよ……、その顔やめて?……痛い、やめて……っ」

すずは……俺の手を握ってくれた。

いつも俺が悲しい時は。

いつも、いつも……数え切れないほど。

俺は……泣きながらすずの手を握った

## 56話

「……っ！」

「すずはまた苦しそうな顔をした。」

「何で……何で笑ってくれないの？」

「………。香月。それ、やめて」

「その言葉はとても冷たい拒絶の言葉」

「……何で？何で笑ってくれないの？何で……」

手を離れた

すると少し安心したような表情をしたけど、すぐにまた苦しそうな顔をする。

「ごめんな、香月……。」

「っ！」

首筋に鈍い痛みがくる。意識が遠のいていく

「……この気持ちを伝えたら俺は……」

「すず……っ！」

## 57話

目が覚めたときにいた場所は、無。  
何も無い、真っ白な世界。

”怖い” 何も無いのが怖い  
・・・向こうから誰か来る。

それは、”俺”だった。昔の何の光もない俺。

苦しいんでしょ？・・・だったら何も考えなくていいんだよ？

<え・・・？>

そう、何も考えなくていい。昔の俺に戻ったらいいんだ。

<戻る？>

そう、戻ればいいんだよ

<戻ると言っても・・・どうやって・・・>

今までの事を忘れてらいいんだ

忘れる・・・？

・・・だめ。

何で、忘れたくない

忘れたく、ない・・・？何で？

<・・・わからない>

すずの事、まだ気にしてるの？

<すず・・・>

すずは”俺”を裏切った『守る』って言ったのに守ってくれなかつたよ？

< . . . . . >

すずは俺が苦しいことを分かっていたのに見捨てたんだよ。

よく、分からない。考えることより言葉が出てくるから

俺は何を言ってるのかもあまり分からない。

中学の時だって、俺がいるっていうのを分かっていたのに助けになんて来てくれなかった。そうでしょ？

< でも . . . . . >

好きだから

< え . . . . . >

すずが、好きだから？だから許しちゃうの？

< 好き . . . . . ? 俺が？すずのことを？ >

違うよね、俺はすずを好きじゃない。裏切った奴を俺はおまえ好きになれる？

< なれ . . . . . >

迷ってるの？ . . . . . あ、そろそろ時間が来ちゃったみたい。

また今度話をしよう？そのときに忘れたいか . . . 忘れたくないか、教えてくれると嬉しいな？

< 俺、は . . . . . >

## 58話(前書き)

何かよく分からないWWW

文章下手でごめんなさい。

なんかもつすごい、意味不明な小説になってきたような気がします

orz

文章の書き方とかめっちゃコロコロ変わってますよね……………。

ごめんなさい。



「残念、ここにありません」

そうやってすずはナイフを俺に見せる。

「っ……！返せ！！」

「おっと……、返してたまるか」

「何でだよ！っ……返せ！！」

ナイフに手を伸ばす。するとベッドの上で暴れていたのが  
バランスを崩して床に落ちそうになる。

怖い、と思って目を瞑<sup>つぶ</sup>ったけれど、痛みは無い。

「……どうやらすずが助けてくれたらしい。

「……」

すずが好き。

急にその単語が浮かんだ、その瞬間に顔が赤くなっていくのが分  
かった。

すずが俺をベッドに戻す。

「何？熱でもあんの？」

すずが俺の額<sup>おでこ</sup>に手を当てる。

さつきより、どんどん顔が赤くなっていく。

「っ！！！や、やめろ！！」

「……こっちこそやめてほしいよ」

「え……？」

俺に近づいた、と思っただけなのに組み敷かれていた。

「や、めろって……！！」

急に石川にされた事を思い出した。

「何？……そんな目で俺を見てさ……誘<sup>いざな</sup>ってるの？」

そんな事を言ってる割に少し悲しそうな顔をしている。

「その顔、やめてよ……」

すずのそんな顔を見るのは嫌だ、俺はすずのそんな顔を見たいわけ  
じゃない。

……無邪気に笑ってる顔が見たいんだ。

そんな事を思ってるうちにもまた涙があふれてくる。

「い、やだっ……そんな顔見たくな、い……っ」

「何で？……俺の事、嫌いだから？」

嫌い。

その言葉が俺の心にグツと刺さる。

「俺、は……っ」

「……まあ、いいよ。」

そういなりすずは俺の上から退いた。

## 59話

そうしてすずは部屋から出て行った。  
俺はずの見た顔がだた忘れられなくて、一人ですつと泣いていた。

いったん落ち着いたので  
自分の部屋に戻る。

さつきからすずの顔しか思い浮かばない。

・・・この痛さが何か分らない。

でも、感じた事の無い痛み、心が重くなって気持ちも沈む。  
この気持ちはいったい何なんだろう・・・。

気づくとまたあの何も無い世界に俺は一人で立っていた。  
俺は待っていた、もちろん俺めいっを。

・・・なのに来ない。その代わりにすずが出てきた。  
何で、何ですすがここにいるのかわからない。

《・・・香月は俺の事好き？・・・俺は好きだよ、お前の事》  
頭が真っ白になる。

嘘だ、嘘に決まってる。騙されるな、これは俺の夢だ。  
すずが居るわけ・・・！

## 60話

なあ、香月

<!?>

頭の真後ろから声が聞こえてくる。  
びっくりして振り返ると  
さすが居た。

動かないで聞いて

<な、何だよ・・・>

耳元に息がかかってくすぐりたい

<は、早く言えよ・・・>

ふっと笑って俺の前に来る

当然俺は顔が真っ赤になってる。

”俺は香月の事、大好きだよ”

吐息混じりに言っていたから

色っぽくて、でもかっこよくて。

耳が蕩けそうになって、もう自分がどうなってるか分からなくて。  
思考も止まる。

今、この空間が止まってるような感覚に陥った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3606q/>

---

BL小説（タイトルが決まらない）

2011年12月11日16時53分発行